

開発好明

ART IS LIVE

よ民ひ

う主と

こ主り

そ義

へ

WELCOME TO
ONE

PERSON

DEMOCRACY

ガイドマップ

MOT

MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO
OF
ART

東京都現代美術館

2024年8月3日(土)

— 11月10日(日)

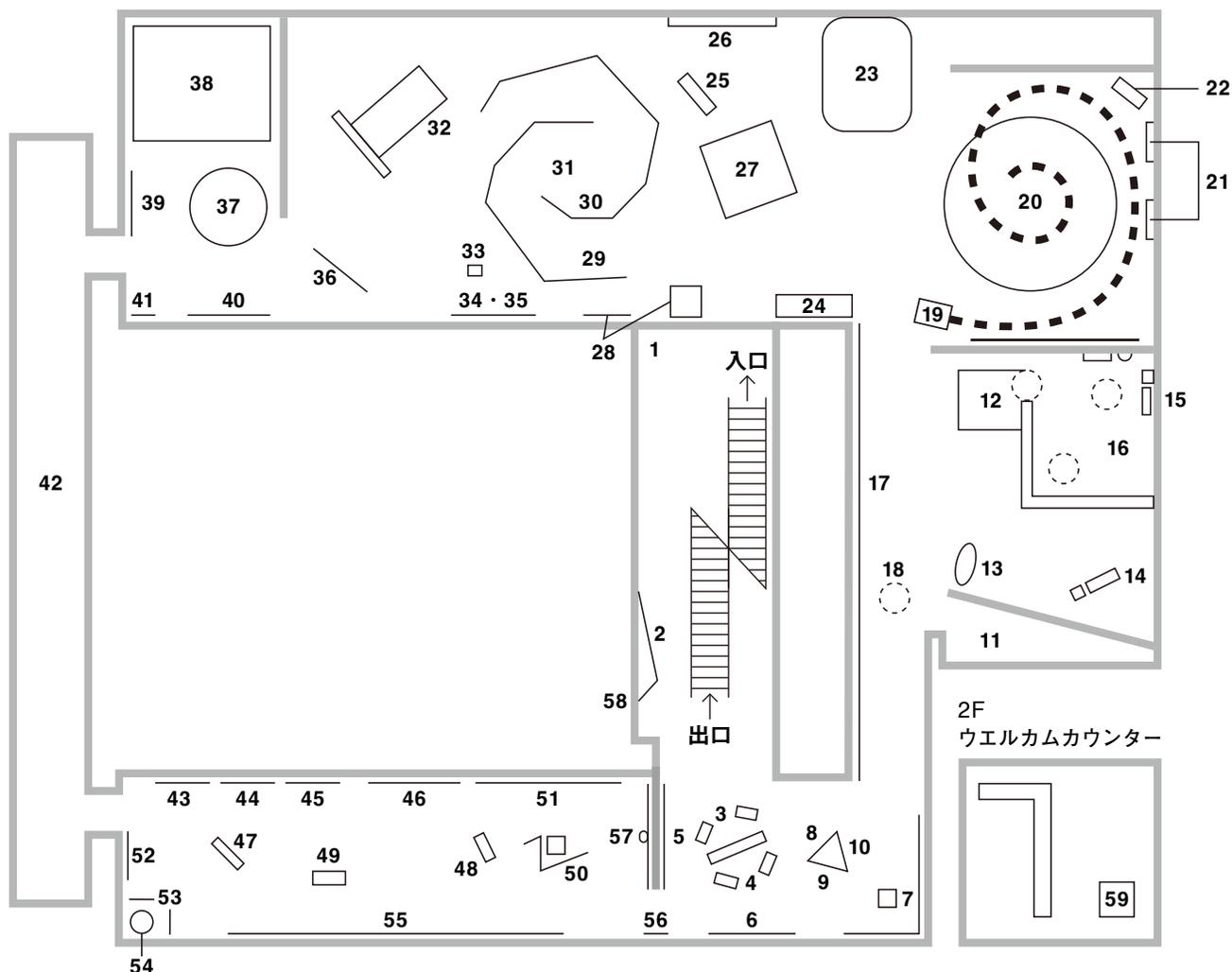
会場 | 東京都現代美術館 企画展示室 3F

主催 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

協賛 | 東急歌舞伎町タワー、HOTEL GROOVE SHINJUKU, A PARKROYAL Hotel

助成 | 公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団

協力 | グランチェスター・ハウス



本展で紹介する開発好明の活動に補助線を引くための鑑賞ガイドです。
マップ上の番号とミニ解説の番号を照合しながら鑑賞することをお勧めします。

- 決まった順路はなくどこからでもご覧いただけますが、おすすめは番号順のルートです。
- 2階で渡されたウェルカムキットの中のアイテムはいくつかの作品で使用します。該当作品に関してはミニ解説に【ウェルカムキット使用】と書かれています。
- 一部単体撮影できない作品がございます。
- 参加型作品または触れられる作品にはミニ解説に“★”を付しています。それ以外はお手を触れないようご注意ください。
- 本展に章立てはありませんが、下記のキーワード群を参照しながら展示をご覧になると開発の多彩な活動についていくつかの傾向が見えてくるかもしれません。そして一通り巡った後には、あなた自身が発見した新しいキーワードを書き足してみてください。

ライフワーク # アートの民主主義 # 発泡と光 # 制度のオルタナティブ

コミュニケーションの(不)可能性 # 寄り添うアクティヴィズム # ほこりと灰(色)

美術史へのアプローチ # 異文化へのアプローチ

● ミニ解説

1 ★ 《ミッション》

2024

「ミッションカード」に書かれたあなただけのミッションを実行することで成立する作品。何気ない仕事をしている隣の人も、もしかしたらミッション実行中なのかもしれない。

2 《ART IS LIVE》

2024

数種類の蛍光灯を組み合わせ、「田中一」、「卍」、「雪」などの文字や記号を象る作品を制作してきた開発の最新作。いびつなバランスの「ART IS LIVE」は展覧会のタイトルサインでもある。

3 《顔写真》

1994-

開発にとって毎日の顔写真撮影は日常の労働としてのアートであり、ライフワークのひとつ。本展では約30年分の写真をプロジェクションで紹介するほか、写真の実物も一部展示。撮影を始めたきっかけは久しぶりに会った友人の「お前、老けたな」という言葉で、今度会ったら数十年分の写真をつきつけてやろうと考えている。

4 《レシート日記》

1992-

開発は毎日ノートに朝はオレンジ色、夜は青色でドローイングを行い、その日入手したレシートを貼っている。作家の生きた証は、店での購入など社会的交換行為を通して、第三者から厳密に刻印される。自分の手で日付を描いたアーティスト河原温《DATE PAINTING》への開発なりの応答ともいえる作品。

5 《レシート絵画 ダン・グレアム》

2024

《レシート絵画 河原温》

2015 個人蔵

《レシート絵画 デヴィッド・ボウイ》

2024

誰かが亡くなった日のレシートを絵画に転写した作品。壁にかかっているものは右から、「ダン・グレアム」(2022年没)、「河原温」(2014年没)、「デヴィッド・ボウイ」(2016年没)が亡くなった日(あるいは死が報じられた日)のレシートを元にしている。本シリーズで取り上げる偉人達は作家の経験や記憶と深く結びついている。

6 《ふせんどろーイング》

2000年代後半-

気軽に使え、持ち運べる「ふせん」に日々描いているドローイング。一人の作家が描いたとは思えないスタイルの多様さは意図的なもので、絵柄が似通ってきたらその日はおしまいになる。展示室では異なる時間の厚みを持ったふせんがモザイクのように壁面を埋め尽くす。

7 《365大作戦》

1995-1996

開発と同じ身長を組み立て式作品を日本全国の一般家庭、ギャラリー、美術館など365ヶ所の協力者に送って1年間展示してもらおうプロジェクト。開発は47都道府県に散らばる全会場を365日間かけて訪ね歩き、最後には作品を回収して焼却することで、協力者の記憶には「見えない彫刻」だけが残った。企画の背景には、貸画廊に頼らず展示場所と展示期間を自ら決めたいという願望、東京偏重のアート情報誌への疑問、「もの」ではなく過程や出来事をアートとしてとらえようとする作家の態度が伺える。本展では、宣伝用チラシやポスター、展示した作品のレプリカ、記録映像、展示場所を示す地図、旅の記念品(メモラビリア)、作品を焼却した際の灰の一部など、実物資料を展示している。

プロジェクト紹介

8 《39アートの日》

2001-2020

毎年3月9日をアートの記念日にして盛り上げ、様々な人がアートに親しむ機会をつくろう、という草の根的プロジェクト。開発が呼びかけをし、2001年3月から開始された。趣旨に賛同すれば団体・個人問わず誰でも参加可能で、内容はそれぞれの参加者に委ねられた。たとえば施設においては割引、イベント、グッズプレゼント、開館延長が実施された。海外からの参加もあった。2020年に一区切りとなったが、現在も個別に継続している施設もある。

9 《FADs アートスペース》

2000-2005

開発の友人をディレクターとして仲間の作家と共に2000年8月、東京の国立市に立ち上げた非営利のアートスペース+ショップ。商業画廊でも貸画廊でもない立ち位置を目指しながら、アーティスト主体での企画を試みた。開発の渡独(2005)に伴い活動が下火になるまで、個展、グループ展、チャリティー展などを実施した。

10 《虹かけ教室》

2015-

小学生の図工作品と美大生の作品を交換して、それぞれの校舎に展示するプログラム。美大生の優れたお手本を小学生に見せるという図式ではなく、手放しにこどものアートを賞賛するというわけでもない。小学校の斬新な図工教育について美大生が学ぶこともあれば、美大生たちの情熱をこどもたちが感じ取ることもできる。そうした経験を鑑賞教育の一環として提示した。これまで7回実施。

11 ★ 《投げ彫刻》

2024

発泡パーツを的に向かって投げると、引っかかったり落ちたりして、自然な形の彫刻となり、日々姿を変えていく。

12 《発泡苑 in MOT》

2024

電化製品の梱包等に使われていた発泡スチロールのユニークな形を生かした茶室「発泡苑」は開発作品の一種のアイコンとなっている。

13 《発泡動物園 in MOT》

2024

発泡スチロールで出来た動物たち。

14 《キョウダイン》

2016/2024

幼い頃に見た兄弟ロボットが活躍する人気特撮番組から着想を得た作品。人型と犬型のロボットの顔(モニター)は、どちらも開発のものである。

15 《発泡ミュージアム in MOT》

2024

発泡スチロールで再現する、現代美術の巨匠たちの作品。
ルイズ・ニーヴェルス(1899-1988) 集めた廃品を黒く塗り、黒い箱に入れて積み重ねた祭壇のような作品で知られる、インスタレーションアートのパイオニア。
リチャード・セラ(1938-2024) 巨大な金属板を用いた重厚な彫刻で高い評価を受けた。
リチャード・ロング(1945-) 自然の中で歩行し、見つけた石や枝を整然と地面に配置するランド・アートを制作。
トニー・クラッグ(1949-) プラスチックゴミを壁や床に配置し、人物などイメージをかたどった作品で知られる。
ドナルド・ジャッド(1928-1994) 工業素材を用いて幾何学的な立体作品を作ったミニマリズムの先駆者。

16 《バグワーム》

2016

借り物の梱包材をまとう蛍光灯ミノムシ。人間が生み出した素材からどんな生物が生まれてくるのだろうか。

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

ウェルカムキット使用

17 ★ 《147801 シリーズ》
2014-
ピカソが生涯で制作したとされる作品数(147800点)を超える147801点の作品を生み出すためのプロジェクト。棚にある木製のオブジェをどれでも1つ持って帰ることができるが、それを自宅に飾り、撮影した写真データを作家に送ることで始めて作品としてカウントされる。
写真の送り先は <kaihatsu@pp.ij4u.or.jp>

18 《ふちおくん in MOT》
2024
意外な場所にいる、ふちおくん。

19 《ドラゴンチェアー》
2008/2024
こどもたちがそれぞれ、自分の体を受け止められる構造のオリジナル椅子をつくり、それを連結させて巨大な龍を出現させるワークショップ「ドラゴンチェアー」。2008年府中市にて最初に実施・制作された「ドラゴンチェアー」は現在も都内小学校を周り、総合計2km以上にまで育っている。本展では新たに渋谷区の小学校で制作されたドラゴンチェアーを展示している。(頭部分は2008年に開発が制作)
協力：渋谷区立千駄谷小学校、多摩地区図画工作教育研究会

20 ★ 《都会生活者のオアシス》
2000
中央のモニターでは泉の映像が流れ、清涼感のある水音が聞こえる。フェイクファーのカーペットでくつろいでいると、ふいに腰掛の下のモニターの人物に話しかけられる。緑あふれる木場公園の中の美術館に出現する、人工の癒し空間は本当に心地よいのだろうか。近くには、どこかでみたことのある顔の人間犬が寝ている。

21 《無題》
1992, 2012
某大手家電量販店チェーンの包装紙デザインを拡大した中に、開発の架空の会社ADF (ART DEVELOPMENT FIRM) のロゴが紛れている。1992年の個展「もはや脳みそ停止展」のために制作したものと、2012年に再制作したものの2点を並べて展示。20年の間で各企業の勢力図が変化していることがわかる。

22 ★ 《演説コーナー in MOT》
2024
オアシスの近くの演説台。希望者は90秒間だけ演説ができる(作家在館時のみ)。

23 ★ 《100人先生 in MOT》
2024
「誰もが先生 誰もが生徒」を合言葉に、会期を通して100人の先生による100回の授業が行われる。学校やカルチャーセンターでは体験できないユニークな授業からマニアックな授業まで、個性豊かな先生たちによって成り立つプロジェクト。

24 ★ 《未来郵便局 東京都現代美術館支局》
2024
郵便局をコンセプトにしたこの作品では、未来への手紙を書くことができる。預けられた手紙は、開発によって実際に約1年後にポストに投函される。手紙を送る人は、手紙を書いたことを覚えているかもしれないし忘れてしまうかもしれない1年という中途半端な時間に意識を馳せながら、現在の感情や言葉をハガキに託すことになる。

25 《今プラ》
2016, 2017, 2019, 2023
通常のデモ活動で掲げられるプラカードでは、同一の目的のもとスローガンやシンボルが描かれるが、「今プラ」では人々がその時感じたままをプラカードに記入して行進する。切実なこと、たわいもないこと、バラバラであるほど平和な世界。これまで複数の国で実施しており、今回展示しているのは横浜、ニューヨーク、ハンブルグ、バクー、台湾での実施記録。

26 ★ 《投票 YES/NO in MOT》
2024
カードを一枚とって裏に書かれている質問を読み、YESなら青、NOなら赤のふせんを壁に貼る。回答できるのは一回のみ。質問は数種類あるが、全体として青と赤がおおよそ同じ割合になるよう調整されている。

27 ★ 《開発's TV in MOT》
2006/2024
壁に囲まれた出入り口のないスタジオからコードが延びてテレビモニターに繋がっている。そこに流れている映像はスタジオ内部の生中継のように見えるが、真偽のほどはわからない。ただし壁に取り付けられた別のモニターを左右に動かすと中の様子も左右に動く。リアルでありながら不確かな状況を生み出す作品。2006年にドイツで発表。

28 《愛銀行 福島県大熊本店》
2016
自分がやってほしいこと、できることを貯蓄し、金銭を介さない助け合いのシステムを提案する架空の銀行プロジェクト。震災後、帰宅困難地域になった場所に第一号店の看板が出現した。本展では福島県南相馬市周辺を宣伝カーで走った時の記録映像と看板を展示。

29 《デイリリーアートサーカス》
2011-
作品を詰めたトラックで日本列島を横断しながら東日本大震災の被災地域に向かう巡回チャリティー展。町と町を結び、日本全体で震災の痛みを共有するべく、阪神淡路大震災の被災地・兵庫から出発し、義援金と応援の声を集めながら、東北まで展覧会やワークショップを届けた。開発が発起人となり、野田裕示、吉澤美香、高橋士郎、タムラサトル、木村崇人、磯崎道佳が作家として参加したほか、多くの有志がチームデイリリーとして運営を担った。道中の出会いが様々なプロジェクトに派生していった。これまでにのべ約150日実施されている。

30 《気仙沼ファサード》《飯館村ファサード》
2012
震災後東北でボランティア活動をしていた開発が道中目にした、人が住めなくなってしまった建物の外観を撮影したシリーズ。《気仙沼ファサード》では津波の衝撃でダメージを受けた宮城県気仙沼市の港付近の建物を、《飯館村ファサード》では震災の影響はなかったが原発事故の影響で全村避難となった飯館村の建物を撮影している。建物にスプレーで描かれたOまたはCrという記号は避難済を意味する。

31 《GIFT AND HOPE》
2011
避難している人々に20kgの物資を届け、その帰りに20kgのゴミを持ち帰る。もしこれをボランティア全員が行っていたら、2011年当時の宮城県の年間ごみ処理の20%をカバーできたのでは、と開発は推察する。

32 《政治家の家》
2012-
福島第一原発から20km圏内、当時避難区域となっていた場所から400m手前に設置された政治家専用の休憩施設。住み慣れた家、地域を出なくてはならない人々の気持ちに寄り添い、未来の政策について現地で考えてもらうことを目的とし、2012年3月15日に建てられた。750名の衆参両院の政治家に招待状を送ったが視察希望者はいなかった。仮設住宅を思わせる広さで、中には時間の停止した時計、大人用と子ども用の椅子があり、それらは原発の方角にある窓を向いている。展示されている家は、会期終了後3代目「政治家の家」として移設予定。

32-a 《やきもちシェルター》
2021-2022
政治家の家では内部で展示もしており、1年に1度展示替えをしている。2021年3月から翌年3月まで展示されていた「やきもちシェルター」は、核シェルターの機能を持つトイレの公園への設置を提案するというプロジェクト。
共同企画：山口尚之

ウエルカムキット使用

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

《北屋形の神楽》

2012

南相馬市北屋形地区の神楽は震災がきっかけで神楽保存会の活動が休止となり、その存続が危ぶまれていた。開発は未来の担い手に向けて踊りや演奏の記録撮影を行ったほか、歯を使って支えるタイプの獅子頭を被ることができなくなってしまった高齢者のために軽量の発泡スチロールとヘルメットで出来た獅子頭を制作した。

制作協力：五十嵐健太、吉野も

《うままつり》

2014

相馬野馬追で有名な地元の文化と歴史を住民自身ももっと身近に感じられるようにと、地元の人々との話し合いを通じて生まれた新しいお祭り。会場はかつて芝居小屋、映画館として親しまれ、震災後に復活を遂げた朝日座。主催：うままつり実行委員会／はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会

《ことば図書館》

2011-

仮設住宅で暮らすさまざまな世代から昔話を聞き、青森から岩手、宮城、福島までの沿岸地域での言葉を記録し、後世に残すプロジェクト。方言は県ごとに異なるのではなく、海岸線沿いに変化するという仮説に基づいて調査をしている。避難による居住地域の分散で、海岸沿いの言語や文化が失われる可能性があることをきっかけにはじまった。

《新世界ピクニック》

2016

被災地に寄り添う活動を模索し続けてきた開発が6年目にたどり着いたのは、フレコンバッグや巨大な堤防、放射性物質を計測するモニタリングポストがある非日常的風景の中で楽し気にピクニックをする写真シリーズ《新世界ピクニック》だった。災害・事故から5年経過し、東京と地方での情報格差、関心の温度差を感じたことから、鮮烈なアイロニーを持つ作品で記憶の風化を防ごうとした。

《涙の池》

2002

かつてツインタワーがあったニューヨークのグラウンドゼロ周辺を掃除して集めた砂埃で制作。中央にはワールドトレードセンターを意味する2つの雫が形作られており、涙が落ちた瞬間にも見える。開発にとって埃は時間の堆積、儂さ、不在の存在を意味し、同時に曖昧なグレーがかった色味を持つ魅力的な素材でもあった。

《飛行木》

1998

1000個の戦闘機模型が直立し墓場のような森を形成している。表面には1995年福井県の高速増殖原型炉もんじゅでのナトリウム漏えい事故が起きた後に周辺で収集した埃がふりまかれている。当時のニュースや国の公表では周辺に放射能漏れはないとされた。もんじゅは廃炉が決定したが、戦闘機も原子炉も処分に数十年という年月を要するという。

《曇り空》

1997

47都道府県の曇り空を映した写真。作家を含む47名によって撮影された。



《毎日デモへようこそ》

2024

開発はウクライナでの開戦翌日より、戦争反対デモの写真からブラカード部分だけを取り出した画像を毎日SNSに投稿することで、小さくてもリアルな声を世界に発信し続けている。このプロジェクトから派生した本作では、来場者がブラカード画像を所定の場所に貼ることができる(1人1枚まで)。あるいは空白のままにしておくこともできる。様々な思いが集積され、重なっていくことでひとつの巨大なコラージュ壁画になる。

《N/Z》

2022 個人蔵

数種類の蛍光灯を組み合わせ、文字や記号の多層性を検証してきた開発の初のアルファベットモチーフ作品。作品を90°横に倒すとZという文字になるが、Zはウクライナ侵攻に参加したロシア連邦軍車両に付された識別用の記号でもあり、戦争支持のシンボルとしての意味を帯びている。この記号が戦争を想起させない時代が来た時に、Zとして展示することができる。

《騒がしい廊下》

2024

一見何もない廊下。通ると様々な音が聞こえる。

《巨大オマージュシリーズ》

2016

近代美術史の巨匠たちの象徴的な造形をオマージュした巨大な衣服。ダニエル・ビュラン(1938-)のストライプパンツ。ピート・モンドリアン(1872-1944)の赤、青、黄コンポジション靴下。ジャクソン・ポロック(1912-1956)のドリップングシャツ。

《フォンタナシリーズ》

フォンタナシリーズ赤色 1994

フォンタナシリーズ黄色 1994

フォンタナシリーズ緑色 2020

フォンタナシリーズ白色 2020

フォンタナシリーズ月 2024

フォンタナシリーズ海 2024

フォンタナシリーズ山 2024

ルーチョ・フォンタナ(1899-1968)は色を塗ったキャンヴァス表面に直接切り込みを入れる作品で知られるが、画集の写真からは黒い線が描かれているようにしか見えない。「フォンタナシリーズ」ではその黒い線が切り込みの代わりに描かれている。漢字をかたどった《海》、《月》、《山》は本シリーズ最新作。会期中不定期に作品が入れ替えられる。

《あなたが見つめる物は私が見つめて欲しい物ではない》

1994

台座のような白い作品が、レディメイド作品のような台座に乗っている。美術史において彫刻が台座を必要としていた時代と、彫刻が台座から自立する時代の間に、作品と台座の関係の逆転が起こっていたという可能性について考えた作品。

《ビデオマン》

2024

頭のモニターで90年代からのパフォーマンス記録や、映像作品を上映している。体のQRコードを読み取って、YouTubeから作品を鑑賞してもよい。

《GRAY》

1997

黒でも白でもないその中間のグレーをテーマにした短編作品。クラシックフィルムをオマージュしたような映像の後は膨大なエンドクレジットが流れる。(7'55")

《海容》

1996

東京ビッグサイトで開催された若手作家のグループ展「オン・キャンプ／オフ・ベース」展でのパフォーマンス記録映像。東京湾から会場内のコンテナまでホースを引き回し、人力かつ独力で海水を吸引した。当時流行していた大腸菌O157は河川や海洋での生息が目目されており、パフォーマンスは感染のリスクの中行われた。(14'53")

《ミサイルマン》

1996

杉並区の中学校で行われた現代美術展「IZUMIWAKU プロジェクト 1996」でのイベント映像。ミサイルに扮した作家と仲間たちが力尽きるまで校庭を駆け回る。(7'42")

48-d 《ジャッカー》

1996

東京・青山界隈で行われた地域アートプロジェクト「Morphe」でのパフォーマンス。スーツケースに折り畳み式の足をつけた持ち運び式のお立ち台に乗り、自らが彫刻作品としてギャラリー空間に介入した。(20'19")

48-e 《フツウ 生と死》

1994

普通に行われている体内の循環を外に出すことで、生と死の生々しいイメージを喚起しようとしたパフォーマンス。10メートルのチューブを観客が持ち、その中を開発の血液が流れていく。誰かが失神するまで続ける予定で始め、実際に途中で観客が失神したため終了した。(2'59")

48-f 《上京物語》

1996

30歳になった開発が企画した、人生を振り返るバスツアー「30-7月3日に生まれて」の記録。参加者はガイドの説明や当時の流行歌を聞きながら、開発の甲府の生家や学校、山梨県立美術館などゆかりの地を巡った。ゆく先々で当時の自分に扮装した開発が参加者を出迎えた。最終目的地である東京のギャラリーでは、歴代の想い人の写真とインタビュー映像が展示されていた。(20'16")

49 《R.MuTTuri》

2019

マルセル・デュシャン作《泉》(2017)へのオマージュ。便器を横転させ、架空の作家名 R.Mutt というサインを入れた「作品」で美術界にスキャンダルを引き起こした現代美術の父に対し、開発は便器を斜めに倒した。便器としてもコンセプトアートとしてもどっちつかずになってしまったオブジェは、山梨の桃ジュースが飲めるサーバーになった。

50 《ヴェネチア・ビエンナーレ日本館への道》

2008

2004年ヴェネチア・ビエンナーレ第9回建築展に参加した開発は、建築家吉阪隆正設計の日本館が本来持つ、外部の自然を取り込む構造が近年生かされなくなっていることを知り、同建築の特性を生かした展示プランを構想した。国際交流基金や美術館学芸員に提案をプレゼンした際の映像と、模型を展示。

51 《イヴ・クライン・スペシャル》

1991

特殊な青の顔料を使ったモノクローム絵画で知られるイヴ・クライン(1928-1962)の《人体測定》は、女性ヌードモデルの体に顔料を塗り、キャンバスや壁に押し付けて形を転写したシリーズである。開発は、そこに欠落している身体部分—性器、それも男性の—だけをプリントしてみたいと考え、自身の体を用いてパフォーマンスを行った。

52 《ベルリンポスター》

2006

ドイツ滞在時代の作品。当時のベルリンの街中のポスターは、貼り替えるのではなく上から重ねて貼るという事を何十回も繰り返しており、ある程度で破棄されるか自然に落下して処分された。開発はそんな重厚な時間の層を持つポスターを持ち帰り、上からペインティングを施した。

53 《ミニ金閣寺》

2008

イギリスのリバプールビエンナーレ関連企画参加時の記録。当時地域周辺には様々な宗教宗派の施設があったが、仏教の寺院だけはなかった。そこで、イギリス最小の建築物でもあり国のシンボルでもある赤い電話ボックスの中に小さな金閣寺をはめ込み、即席の寺院に変化させた。また、周辺の宗教施設を掲載したマップを配布した。

54 《千鶴》

1999

ニューヨーク滞在時代の作品。当時アメリカのTV番組では女性のトップレス姿は映らないが、ポルノ雑誌は無修正だった。反対に当時の日本ではポルノ雑誌に修正が入る一方、TV番組で女性のバストを映すこともあった。日米の考え方の顕著な違いや規制のねじれをテーマに制作された。

55 《日の出・印象 2024》

2024

助成を受け作家として初めて海外に出た事によって、今まで意識しなかった日本人としてのアイデンティティを考えることになった開発のニューヨーク滞在時代の同名作品(1999)を、スケールアップして制作した。タイトルは印象派の名作から借りている。日の出・日の入りの太陽の動きを表す9枚のパネルは憲法9条の象徴でもある。日の丸はどこまでの「ズレ」であれば日本のシンボルとして許容できるのか。憲法はどの程度の「ズレ」、あるいは解釈の範囲を許容するべきか。

56 《Happy Bird Project》

2002

フォーチュンクッキーの中に占いの紙が入っており、いずれにも「あなたは街中で銀の鶴を見つけると良いことがある」と書かれている。実は街中にはあちこちに銀の折鶴たちが配置されており、占いを読んだ人が偶然それを見つけて幸せな気持ちになることを期待するというプロジェクト。もちろんその幸運を作家が知ることはできない。ニューヨークで最初に発表された。

57 《ドキュメンタ9 パフォーマンス “プチ・ギャラリー”》

1992

多摩美術大学大学院在学中、開発は世界最大級の現代美術の祭典であるドクメンタの会場に友人と共に乗り込み、体に取り付けたモニターで映像作品を上映するというパフォーマンスを無許可で行った。目標は世界の舞台から排斥されることで作家としての0地点、スタートに立つこと。この招かれざるアーティストは2週間の滞在期間中、誰にも排除されることなく1000枚のカードを配布し終えた。

58 ★ 《握手》

2024

壁から突き出ているブロンズ製の作家の右手と握手ができる。コロナ禍を経て、ふれあいを再認識するために制作した。

59 《インタビュー》

2001 東京都現代美術館蔵

開発が1人で繰り返すインタビュー不在の滑稽なインタビュー。真剣な答えや軽やかな返事、大げさな相づちなど、場面ごとに答える内容も雰囲気もばらばらである。ありがちなインタビューのようだが、見る側が何かの答えを見出そうとしたり理解しようとしても何の答えもない言葉が続く映像。(10'47")

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

プロジェクト紹介

★

プロジェクト紹介

執筆 小高日香理、権 祥海

デザイン 佐々木 俊

制作 東京都現代美術館

©Museum of Contemporary Art Tokyo 2024